

秀賞

挑戦の一杯

秋田県大仙市立西仙北中学校

1年 高橋 知

「お母さん、豚丼のたれの配合教えて。」

「冷蔵庫の横にはってある紙に書いてる。」母と祖母の会話が私の耳に止まつた。いつもは気にも留めない二人の会話が私の中のチャレンジ精神を動かした。

私の祖母はおばあちゃんと呼ばれるのを嫌がる。70代後半は立派なおばあちゃんなのに、おばあちゃんと呼ばれると「本当のおばあちゃん」になった気分になると言う。70代の割に若く見える私の祖母は、掃除が好き、体操が好き、お花を育てることが好きで、朝早くから夜寝るまでとにかく動いている。手も足も口も、いつも元気に動いているスーパーおばあちゃんだ。元気いっぱいと自負しているからか、「自分のことはおばあちゃんじゃなくあ一ちゃんと呼んで」と、孫一同に言い聞かせている。そんな元気だったあ一ちゃんに、ある日病気が見つかった。

病気は重い感じで、あ一ちゃんの体は日に日に小さくなっていくように見えた。病気が猛スピードであ一ちゃんの体に悪さをしているわけではないようだったが、気持ちが落ち込んでいるのか、笑っていても話していてもスーパーな感じがしないおばあちゃんのような気がした。1回目の検査入院で家族一人いなくなつたわが家の朝は、皆それぞれ自分の準備にバタバタしていたが、なんだか静かになつたように感じた。当たり前の日常が突然変わることについていけない気がしたが、私以上に母の生活は一変したようだった。あ一ちゃんの存在の大きさを一番感じていたのは母だったと思う。仕事のこと、子どものこと、家族のこと、家庭のこと。そしてあ一ちゃんのこと。優先順位を変えなければ毎日を乗り越えられない。何も言わないけれど、私を見つめる母の目から、私は、母の痛切な思いを感じていた。

中学生になった私だけれど、家族に頼っていることは多い。母は朝早く仕事に行くので学校へ行く私を「行ってらっしゃい」と送り出してくれるのはあ一ちゃんだった。朝の食卓に並ぶ味噌汁は、毎朝4時に起きているあ一ちゃんが作ってくれていた。私が好きな味噌汁は、かき玉汁、豆汁、麩と豆腐の味噌汁、舞茸の味噌汁、アサリの味噌汁。祖父が元気だった頃は山の幸も味噌汁のいい出汁になって登場していた。あ一ちゃんの日替わり味噌汁を、母が作るようになった。きれい好きなあ一ちゃんの朝の掃除はルンバが担当、あ一ちゃんが好きなお花の水やりは祖父が担当、ゴミ出しあはいつもどおり父がやる。私は？ 私

は何をやっているんだろう。自分のことだけで家族のために何かしているかどうか。これまでの自分に気付き恥ずかしくなった。それでも毎日自分の勉強と部活の準備で精いっぱいの私は、相変わらず自分のことだけで一日を終える生活を送っていた。そんな中、検査入院を終えたあーちゃんが戻ってきた。

妹はあーちゃんが作る豚丼が大好きだ。あーちゃんは市販のたれは使わない。あーちゃんは時々古いノートを見ているときがある。それは、祖父の母から聞いた数々の味、作り方が書いてあるおたからノートだった。その中にたれの配合もあった。妹が好む味をいつでも豚丼として提供できるようにあーちゃんは広告の裏紙に書き、それを冷蔵庫の横にはっておいたのだった。母が作るあーちゃんの味。それは、あーちゃんに近づくための母の挑戦なのだと思った。そして私は。この夏、わが家の味噌汁担当者になるというチャレンジを決めた。時間との闘いの朝、母の味噌汁を作る時間は5分。母のように豆腐を手のひらの上でさいの目切りにしていくことは私にはできない。順番を言ってもらわないとできない要領の悪い自分を自覚し、まずは考えることを始めた。チャレンジはよりよく考えることだ。夏休みに入り、私のチャレンジはスタートした。そして、あーちゃんは2回目の入院をして、病院生活が始まった。つらい治療が始まるそうだ。帰ってきたら私の作った味噌汁を食べさせたい。私は、あーちゃんの病気にいい食材を調べ、1週間の味噌汁の献立を考えた。かき玉汁、豆汁、アサリ汁、舞茸汁。「あれ、私の好きなあーちゃんの味噌汁じゃん。」なんだか涙が止まらなかった。母に教わりながら作った私の味噌汁を家族で味わう。「うん、いいんじゃない。」その言葉が私の挑戦を後押しする。